

## 菊池 聡

学校名：横浜市立いちよう小学校 担当教科：国際教室担当

### 1. 今回のカンボジア研修における目的やねらい

- ・カンボジアの正しい歴史的背景の理解を通して、日本に在住するカンボジアにつながる方々への支援の在り方を探る。
- ・カンボジア政府及び諸外国政府、NGO 等による復興と開発の現状を知る。
- ・カンボジア国内の様々な条件下に暮らしている子どもたちに対して、今の生活・将来への思い等をインタビューし、日本の子どもたちとの交流の可能性を探る。

### 2. 目的やねらいの達成度

- ・クメール王朝下の繁栄期、ポルポト政権下における大量虐殺、80年代以降の難民流出時代、そして現代社会への復興と開発・・・それぞれの時代に生きる人々の考えや思いに触れることができた。共通して言えることは、10年位前まで戦争や内戦を繰り返しながら国ができてきただけに、人々の心には、依然として戦争の傷跡が残っていた。
- ・国の復興や開発は、全国民の願いでもあるが、実際は経済格差等の諸問題も蓄積され、庶民にとっては現状の生活を維持することが精一杯である。またインフラの未整備に合わせて、情報化産業も進んでおらず、地域のコミュニティが孤立化していた。
- ・ゴミ山、スラム、農村、日中友好学園、孤児院、水上生活者等、通訳を通して多くの子どもたちの声を聞くことができた。

### 3. カンボジアから学んだこと

- ・内戦、クメールルージュ、ポルポト、大量虐殺、地雷、難民・・・内戦後十数年経つというのに、未だ至る所に影響が残されていた。ポルポト氏の残酷きわまりない非道な足跡が、首都プノンペンだけではなく、今回訪れた地方都市スヴァイリエン、プレイベン、そして古都シェムリアップ等でも確かに見られた。建造物の破壊や地雷被害者・・・特に印象的だったのは、ドライバーや通訳、ガイドしていただいた身近な方々の中にでさえ両親が虐殺されたとか、強制結婚させられたなど、様々な背景を抱えていることがわかった。
- ・カンボジアには、多くの支援団体、NGO 等のドナーが入り込み、復興と開発に支援している現状を知った。日本も戦後、GHQ 等の支援や援助を受けて急激な経済成長を成し遂げた経緯がある。では、どうしてカンボジア政府ではできずに、各支援団体に委ねているのか？その答えはポルポトが行った知識層の大虐殺にあることがわかった。当時、国政を支えていた20～40代の各知識人を虐殺したことの影響で、現代の30～50代の知識層が丸ごといないということである。この層を埋めるために、各支援団体がそれぞれの分野で支援をしているのである。現代社会から取り残されたように見えるカンボジアの復興の鍵は、カンボジアに暮らす人々が夢を抱き、毎日を安心して生活できるための生活環境・習慣の確立、教育の充実、そしてそれに関わる法の整備が望まれる。そして国力を高めるためには、人々の人権意識の向上が欠かすことができないキーワードになっていると考える。
- ・子どもたちへのインタビューを通して、多くの子どもたちが「勉強が好き」「もっと勉強したい」と答えた。『将来の夢は？大きくなったら何になりたいか？』の質問に対して、学校に通っている子どもたちは、教師、医者、エンジニア等の具体的ビジョンが見られたものの、スラム街や農村部で暮らしている子どもたちからは、「わからない」「普通の生活」といった回答が得られた。『一番欲しいもの』の質問には、前者の多くは「知識」、後者は「お金」「文房具」「洋服」のような回答だった。経済格差はもちろん、毎日の生活を維持するだけで精一杯の地域への支援や政策が滞っているよう

に感じた。現代社会は情報化の社会ともいわれている。カンボジア国内の情報はもちろん、世界各地の情報を知ることができる環境づくりや、富裕層から貧困家庭にお金が流れるような法の整備が望まれるところである。

#### 4. 研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

・本校には、カンボジアをはじめベトナム、ラオス、中国等につながる児童が多数在籍している。そのような児童の多くは、自宅では母国の文化、一歩外に出ると日本文化の中で生活している。つまり異文化間を移動しながらの生活ではアイデンティティの確立が揺らぎ、自己肯定感や自尊感情も望ましく形成されない現状にある。そんな児童に対して、どんな支援が必要なのか、周りの児童への働きかけは・・・？今回の研修で、日本人とカンボジア人との価値観の違い、支援する側がよかれと思ってやっていることが実はありがた迷惑になっていることもあることを知った。したがって、外国につながる児童・人々とのコミュニケーションを密にし、何を悩み、何に苦勞し、どんな思いや願いを抱いて生活しているかを知り、心を支える支援をすることこそが大切になってくると考えている。様々な教育活動の場面において、心と心が通じ合えるような関わり方をしていきたい。

・日本人をはじめ、多くの方々にとってカンボジアは、悲惨なイメージが強い国である。小学校では見られないものの、中学校以降になると周りから指摘されることも多くなるようだ。小学校期における支援は、カンボジアにつながる児童が、「カンボジア人に生まれて良かった」と思えるような支援をすることが大切である。そのためには、周りの児童に対して、「カンボジアはすてきなところだね」「ぼくも、わたしも大きくなったら行ってみたい」と思わせるような支援、一人ひとりのちがいを認め、共に仲よく暮らしていけるための心の情操教育をしていきたい。

#### 5. 研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

・参加者の中で、カンボジアの方々と学び、そして唯一カンボジアを訪れたことがあるのは私だけで、研修の初回から他の参加者とは見方や考え方に若干温度差を感じていました。私としてはカンボジアで暮らす人々を教材にして自分たちの生活を見つめ直す国際理解教育的な取組は、少なくとも本地域では必要ないと思っています。悲惨な内戦から必死に復興の中を生きる人々の前向きな思いを知り、自分たちにできることを考えたり、目の前にいる異なる文化をもっている人々との関わり方を考えたりして、違いを認め、楽しみ、今日を共に生きる、明日を共に考える多文化共生的な実践が必要と考えています。しかし、事前研修や現地研修を通して、同じテーマで語り合い、カンボジアを切り口に意見・思いの交流ができたことがよかったです。今後、私一人では何もできません。せっかく知り合ったこのネットワークを今後も生かしていけるようにしたいと思っています。

・学校現場では、多くの場合、授業を参観し、その後授業研究会をもって話し合うといった研究の形態が一般的です。可能ならば、JICAと教育委員会が協働していただき、参加者の中から公開授業実践者を設定して、みんなで参観、その後研究会をもち研究を深める、といったような展開があれば、浸透していくと思われれます。私たちは行政指導の中で実践している立場ですから、JICAと行政が連携しながら、横浜の国際化を教育を通して支援できるような体制づくりを期待しています。

#### 6. その他研修全般を通じての感想・意見など

・外務省の外郭でもあるJICA企画ですから、参加者の「健康と安全」のために、きめ細やかな日程を設定していただき感謝申し上げます。おかげさまで、参加者全員が大きな病気や怪我もなく無事に帰国することができました。ありがとうございました。

#### 7. 今後の本研修参加者へのアドバイス等

・短期間の中で、あれもこれも・・・というのは無理でしょう。帰国後の教材づくり・授業のビジョンをしっかりとって研修に望むことが求められます。もっと聞きたい・・・という気持ちはわ

からないわけではありませんでしたが、視点を見失わないような話し合い、そのためには、「これだけは聞いてくる」「これだけは会った人に共通して聞いてみる」といった計画をもっていくことが大切だと考えます。

